

## 「見るスポーツ」による地域貢献

駒場 涼花

### (1) なぜ「見るスポーツ」なのか

2012年にスポーツ基本計画が策定されて以降、わが国ではこれまでにさまざまなスポーツ政策が行われてきた。スポーツ基本計画の基礎として掲げられたスポーツ立国戦略は、「するスポーツ」「見るスポーツ」「支えるスポーツ」の3つを重視している。まず「するスポーツ」に関しては、2020年に東京オリンピック・パラリンピックの開催が決定したことにより（現在では新型コロナウイルスの影響で延期、2021年に開催を予定している）、国際的な競技力の向上やスポーツを通じた交流のあり方に注目が集まっている。また、国内のプロスポーツ界のさらなる発展のため、アスリートの育成・強化にも力を入れていく方針だ。

こうしたプロスポーツの支援に加え、近年低下が著しい若者の体力や運動頻度は、地域における根本的支援が必要であると考えられており、地域でのスポーツ（生涯スポーツ）のあり方にも色濃く変化が出ている。その一例として、地域におけるスポーツ参加機会を増やすための施策、「総合型地域スポーツクラブの育成」という言葉が出てきて久しい。総合型地域スポーツクラブとは、幅広い世代の人々が自分の関心や運動能力に応じて自由にスポーツを選択し、適切な指導の下で運動をすることができる施設のことである。レベルに応じた指導、向き不向きの発見など自分に合った方法で力を伸ばしやすく、若者のスポーツ実施率向上やプロスポーツ選手育成に大きく貢献すると考えられている。

一方で、「見るスポーツ」の重要度も増してきている。国際的に大きな盛り上がりを見せるオリンピックはもちろん、国内でのプロスポーツ観戦へ関心を向ける人も少なくない。スポーツ観戦による経済効果が高いことが証明され、政策においてもスタジアム・アリーナなどの整備や、その周辺の交通機関の調整などが積極的に進められている。しかし、プロの試合を見るためには遠くの会場まで出向かなければならないことも多くあり、現在のプロスポーツ観戦はどこか「非日常」の域を出ない。地域での「見るスポーツ」とは、地域ごとの偏りがなく日常と結びついてできるようなもの、つまりは部活動に関連する競技大会や自治会規模の運動会などに着目する必要がある。そういった意味で、前述の「するスポーツ」とは対照的に、「見るスポーツ」の地域での役割はまだまだ小さいといえるだろう。

このように現在のわが国の政策は、プロスポーツに対しても地域スポーツに対してもより「するスポーツ」に重きを置いている。とくに地域での政策は、住民の運動への主体的な意欲があることを前提にしており、参加へのハードルがやや高い印象である。地域のスポーツ施設が増えれば一定数のスポーツ実施率増加は見込めるが、より直接的に参加意欲を向上させるためには他の方法を探る必要がある。そこで、より参加へのハードルが低いスポーツ観戦、いわゆる「見るスポーツ」の力に着目し、その広い効果が地域において活用されるべきであると考えた。本論では、スポーツ観戦による感動はどのように生み出されるのかといった先行研究を参考にし、地域でその感動の効果を活かさないかを考える。

## (2) 「見るスポーツ」に関する先行研究

Elias・Dunning (1995) によれば、スポーツを観戦するという行為を、社会生活を営む上で抑圧されている暴力的、攻撃的感情（スポーツ観戦においては興奮など）を自由に吐露できるものとしている<sup>1</sup>。杉本（2017）による研究では、スポーツを見るということは、視覚的に見ているだけでなく身体そのもので見ているということであると結論付けている<sup>2</sup>。つまり、選手に自分を投影し同化することによって興奮、感動が喚起されるということである。押見・原田（2010）による研究では、感動場面尺度について調査している。結果から、スポーツ観戦による感動は選手・チームのパフォーマンスやスタジアムで醸成される興奮を伴った雰囲気といった、コアプロダクトによる影響が強いとされた<sup>3</sup>。これをもとに行った押見・原田（2013）の顧客感動・満足モデルをもとにした研究では、スポーツ観戦で喚起される感動が、再観戦意図やロコミ意図に強く影響する可能性があると考えられた<sup>4</sup>。

これらの先行研究を参考にすると、スポーツ観戦による感動の要因は以下の3つの分類に整理できる。1つ目は、卓越したパフォーマンス、計算された戦略などの競技性による感動。2つ目は、ある選手のこれまでの苦悩のスポーツ人生やドラマ性があるゲーム展開などの物語性による感動。3つ目は、会場が盛り上がったときの一体感による感動である。

上記に挙げたような研究を見ても分かる通り、これまでの研究ではスポーツ観戦により感動した観客の再観戦意図、ロコミ意図への影響などに絞った調査が多く、その後の生活への影響まで言及しているものはほとんどない。本論ではあえてその後について言及し、感動による観戦者への影響をもっと広く生活に結びつくものとして考えていく。

## (3) 感動によってもたらされる効果

まず考えられる効果の1つ目は、メンタル面への好影響である。一般的に「感動」というと、うれしい出来事があったり、映画や小説に触れたりすることで喚起されるものとして考えられている。それに対してスポーツ観戦は、一人または少人数で体験するこれらの感動に比べて規模が大きく、より感情を表出させやすいという特徴がある。日常生活を送る上で感動する機会が少ない中、スポーツ観戦をあらたな趣味として日常に取り入れることは、生活にハリをもたらすという意味で価値が高いといえる。

スポーツの特徴として、世代を問わないという点は重要である。近年では、あまり知られていない趣味やマイナーな層を対象にした商品を使って地域を盛り上げるという取り組みも多く出てきた。しかしターゲットを絞らないという点で、スポーツにはそれらと違った活用可能性がある。

たとえば働く若者に関して考えてみれば、仕事でたまった疲れやストレスを発散するための手軽な趣味として大きな効果があるだろう。近年は仕事に関してだけでなく休日のリフレッシュも都会へ集中する傾向があり、地域で過ごす時間が少ない。数あるリフレッシュ方法の中の1つとして地域でのスポーツ観戦が選べるようになれば、休日の過ごし方の幅も広がり充実感が生まれるのではないだろうか。一方で高齢者に関して、メンタルの健康

は身体健康にもつながり得ると考えられる。スポーツ観戦による「疑似体験」、つまりスポーツ観戦を通して自分のことのように達成感を得ることは、他のコンテンツによる感動にはない「身体を動かしたような実感」を伴う場合がしばしばある。こうした疑似体験を通して感動することは、激しい運動を制限されていたり身体を動かすことが億劫に感じたりする高齢者にとって非常に効果的なリフレッシュになるだろう。プロスポーツ観戦のために遠くの会場に向かったりテレビ中継を長時間見たりするのではなく、身近な地域でもっと手軽に観戦できれば、地域の高齢者のメンタルの健康増進につながり活力が生まれるのではないだろうか。

また、「だれかを応援する」という行為から得られる効果も大きい。応援するということはその人の魅力や努力を理解し、支えになりたいと考えることであり、メンタルが健全に保たれているということの意味する。また、「応援は自分へのエール」という考え方があるように、だれかを応援することは自分を奮い立たせることにもつながる。この後詳しく触れるが、同じ立場で応援することによって応援者同士の仲間意識にもよい影響があるとされている。

2つ目の効果は、子どもの成長への好影響である。これは「するスポーツ」にも関係する点になるが、観戦する側と違った点で観戦される側（応援される側）にも高い効果があるということである。プロスポーツでは一部の人々だけが選出され、年齢層もある程度限られてくるのに対して、地域でのスポーツ、とくに子どものスポーツ参加の機会は全員平等に与えられており、成長を手助けするための重要な役割を担っている。そのスポーツを介して地域全体で子どもの成長を支えていくことはできないだろうか。

プロスポーツにおいては負けたときの大きな責任が伴うが、学生はそういった大きな責任を背負うことなく自分の夢や目標、チームの一員としての責任を背負って試合に臨んでいる。そこに応援の声があることで実力以上の力を発揮できたり、試合外での努力や練習へのモチベーションが高く維持される。選手がのびのびとプレーできるようになるのである。一方で試合に負けてしまったとき、応援の声は選手を元気づける力となる。スポーツによる子どもの成長に直接関与することは難しいかもしれないが、こうした応援を通して成長を見守り、小さな支えとなることはできるのである。

こうした応援する側と応援される側の関係は循環している。応援があるからこそ懸命な姿やプレーが生み出され、それによって見ている人々は感動をもらい、また応援しようと思えるのである。プロスポーツ観戦はその高い技術や高度な戦術に感動するが、地域での部活動ごとの大会では本当に興奮や感動は起きるのだろうかと考える人もいるかもしれない。しかし、高校野球を思い浮かべてみてほしい。年齢を問わず多くの人々が高校球児の夢とプレーに感動し応援する。応援団の応援も含めて毎年大きな感動と盛り上がりを見せる。もっと身近な例でいえば体育祭なども同じだろう。プロと比べてしまえば技術も経験も劣るが、同じクラスのチームを一生懸命応援し、その頑張る姿から得られる感動はプロスポーツ観戦にも引けを取らない。こうした感動が生み出されるのは観戦者がいるからこそ、応援があるからこそそのものであるといえるのである。

選手にとって応援の声は、成長のための糧となる。地域での子どものスポーツ観戦をすることは、子どもの成長を支えるという意味で高い効果があるのである。

3つ目の効果は、運動習慣の醸成である。小さい頃からスポーツ観戦を通してスポーツに触れることができる環境ができていれば、スポーツを身近なものとして感じるようになり、より多くの参加が望めるかもしれない。また、運動への苦手意識があったり関心がなかったりする若者に対して参加へのきっかけとなったり、高齢者が身体を動かそうという意識を芽生えさせることにもつながるかもしれない。冒頭で述べたようなスポーツ施設の整備とセットで行うことで、効果的に運動習慣の醸成につなげることができるだろう。

4つ目の効果は、地域全体の一体感の創造である。前述の「応援」による効果で述べた通り、応援は応援者同士の仲間意識を生むという意味でも重要な行為である。スポーツ観戦のために実際に会場にいった経験がある人であれば想像できるだろう。同じ空間で同じ瞬間に緊張したり盛り上がったりすることは、会場全体の一体感を生み出し、それが我々の感動や興奮に大きく影響する。たとえまったく知らない人同士であっても、同じチーム、同じ選手を応援することは自然な心のつながりを生み出し、仲間意識を芽生えさせる力があるのである。

現在、地域のコミュニティの力が縮小していることが問題視されている。一度離れてしまった距離感をもう一度縮めるのは簡単なことではない。各自治体がさまざまな取り組みを模索する中で、スポーツ観戦により自然と生み出される一体感や盛り上がりはもっと着目されるべきだといえるだろう。スポーツ観戦による感動を一時的なものとして捉えず、継続することで大きな効果があるという可能性を前向きに検討することが重要である。

このように、スポーツ観戦による感動の効果は一過性のものにとどまらず、長期的にみて地域により効果を与えるさまざまな可能性をはらんでいる。本論では心理面の変化を重視し、①メンタルへの好影響があること、②子どもの成長の手助けとなること、③運動習慣の醸成につながり得ること、④一体感を創造できることの4点を指摘した。これらは「するスポーツ」による効果と重なる部分もあるが、「見るスポーツ」特有の力による効果も多く見られる。このことから、地域で「見るスポーツ」がもっと活用されるべきであるということを示唆しているといえるだろう。

#### **(4) 住民の応援が支えに—海部川風流（ふる）マラソン—**

ここからは、以上のような「見るスポーツ」の可能性を踏まえて、現在行われている地域スポーツの具体的な事例を4つ挙げながら検討を加えていく。

まず1つ目は、海部川風流（ふる）マラソン<sup>5</sup>だ。徳島県海陽町で毎年行われている市民マラソンのことである。会場へのアクセスも悪く、参加者の規模も2000人と大きくはない。しかし日本最大級のランキングサイト「RUNNET」の評価では、連続して全国1位を取り続けている<sup>6</sup>。その高い評価の理由は、意外にも地域住民の応援の声なのである。

参加者が走るコースは自然を感じられるゆったりとした川沿いであり、その沿道にはたくさんの方々が応援に集まる。ゴール地点手前の上り坂まで来ると、地元の高校生たち

がゴールまで併走してランナーを後押ししてくれる。何気ない「がんばれ」の一言や、子どもとのハイタッチが非常に励みになると参加者は口をそろえて評価する。この市民マラソンが多くの人々に愛されているのは、こうした地域住民のあたたかなおもてなしを受けることができるからなのである。

市民マラソンを「見る」上で重要なのは、町中を走るランナーたちが自然と地域住民の目に留まることなのではないだろうか。大規模な施設で開催される大会では選手、観戦者に関わらず参加する・しないの境界線がはっきり引かれてしまうが、市民マラソンはその境界線が曖昧である。自然と住民はそこに観客として参加し、自然と応援の声が出る。ランナーから「ありがとう」と一言返されるだけで自分の応援が励みになっている実感が湧く。こうしたスポーツ観戦による良い影響を受けて海陽町の住民は、「おもてなしの心」が芽生えたのではないだろうか。これは、小規模な大会にしかない、参加者と観戦者の距離感が近いという条件のもとでのみ生み出される効果といえるだろう。

海部川風流マラソンを見て分かるのは、住民の応援によってランナーが元気づけられているだけでなく、地域住民もまた「おもてなしの心」を学んでいるということである。卓越したプレーや手に汗握るゲーム展開に興奮する観戦とはまた違った、日常と結びついた小さな心遣いのような応援が、地域住民の一体感とあたたかい雰囲気づくりにも貢献しているといえるだろう。

#### (5) 応援団が学生と選手をつなぐ—大学野球の早慶戦—

2つ目は、早稲田大学と慶應義塾大学の間の伝統的な戦いである早慶戦だ。かつては今のプロスポーツ業界にも引けを取らない盛り上がりを見せていた大学スポーツだが、現在ではその規模は縮小してしまい、観客数も大幅に減少している。ごく少数の身内のみが見に来るといってほぼ無観客状態の試合も珍しい光景ではない。そんな中で、100年以上の歴史を誇る早慶戦は、今でも毎シーズン大きな盛り上がりを見せ、大学スポーツの象徴となっている。早慶戦の中でも一番盛り上がるのが硬式野球である。毎年行われる6校対抗のリーグ戦、東京六大学野球<sup>7</sup>ではメインとなる最終週に早慶戦の試合が組み込まれ、数ある大学野球の中でも最も多い来場者数を誇る。会場内外の圧倒的な人の多さと観客の熱量を目にすれば、この試合がいかに規模の大きいものか分かるだろう。

早慶戦の中で注目すべきは、大学スポーツであるのに大きな盛り上がりを見せるという点ではない。この試合を見に来る人、応援する人を軽視しないそのスタイルにこそ注目すべき点がある。特徴的なのが応援団である。それぞれの大学の応援団は相手のスタンドで応援歌を歌ったり、早慶戦特有のバンド合戦を行ったりする。相手校を煽るような演出で観客の士気を高めるのである。また、応援歌や校歌は観客全員が声を合わせて歌い上げ、会場を揺るがすほどのエネルギーを生み出す。大学スポーツでは珍しいことに、観客の「応援」そのものを一種のパフォーマンスとして完成させているのである。

こうした盛大な応援によって生み出される効果は、試合中の選手のモチベーション向上や観客の感動喚起などにとどまらない。大学スポーツにおけるスポーツ観戦は、大学を起点

とした人々のつながりを強固なものにする力を持っているのである。早慶戦が盛り上がる大きな要因は、観客にOB・OG含め大学に関係している人々が多くいるところにある。大学時代のことを懐かしく思ったり、大学時代の友人と会うために参加している人々も多いという。大学において大々的で象徴的な試合を行うことで、その試合に携わったという固有の強い印象が個人の記憶の中にいつまでも残り、永く地域と結びつけるのである。大学に限らず、小さい規模の地域を起点とした他にはないユニークなスポーツ観戦のスタイルを誕生させることができれば、大学や地元への誇り、愛着を生み出し地域とのつながりを強固にすることができるのかもしれない。

早慶戦が示すのは、応援に関する感動や興奮の記憶はすぐに消えてしまうものではなく、長い間人々の心の中に残るということである。こうした記憶は、関係する人々同士の結びつきや地域への愛着を廃れさせない力を持っていると言えるのではないだろうか。

#### (6) 全員参加の盛り上がり—社内運動会—

3つ目は、社内運動会である。社内運動会とは、企業が開催し社員が参加する運動会のことである。リーマンショック以降開催する企業は著しく減少していたが、近年復活の動きが活発になってきているという。社内運動会の最大の目的は、社員同士の親睦を深め会社全体のチームワーク力を上げることにある。ちょうどいいレジャー要素が含まれることで、日々の仕事を忘れてリフレッシュすることもできる。まさに企業にとって有益な活動といえる。

大手自動車部品メーカーである株式会社デンソーは、社内運動会が非常に盛り上がる企業として注目されている<sup>8</sup>。全国各地の製造所ごとに予選を行い、勝ち抜いた約3000人の社員によって本戦が繰り広げられる。当日までの練習にも手を抜かず、まるで部活のようなハードトレーニングを行う社員も多いという。また、大手自動車メーカー、トヨタ自動車の開催する社内駅伝「HURE!フレ!駅伝」<sup>9</sup>は70年以上の歴史を誇る大イベントとなっている。性別や年齢、目的に合わせてさまざまなプログラムが用意され、参加者は日本各地に限らず海外からも訪れるという。

社内運動会とは、いわば大人の体育祭である。その効果は「参加」して楽しむだけに限らない。そこには「見る」という機会も用意されている。学生時代の体育祭でクラスメートを応援したように、同じチームの同僚を応援することができるのである。応援を通した興奮体験によって、普段はなかなか出せない素直な感情が自然と出てくるようになる。こうした経験を通して自然とコミュニケーションが生まれるのである。また、個人的に趣味で行くプロスポーツ観戦とは違い、企業の社員全員が参加することによって、その効果は組織全体に及ぶ。目的として掲げているチームワーク力向上はもちろん、仕事へのモチベーションが上がったり、良い関係を築くきっかけになったりと日常に直接結びつく効果が高い。こうして同じ感動体験を組織全体で共有することは、個人のみで完結してしまう趣味の範囲の感動体験よりも何倍も効果があるのである。

大人になると、自身が主役となって大会に出場したり大勢で盛り上がったたりする機会というのは減ってしまう。それをあえて職場が生み出すことで、「見るスポーツ」を体験でき

る機会、つまり感動や興奮の機会を自然と生み出すことができるのである。社内運動会復活の動きが本格化されれば、「見るスポーツ」への距離感が縮まることは間違いないだろう。

#### (7) 小学校を交流拠点に一打瀬小中学校地域交流スポーツ大会（ウタスポ）

最後の1つは、打瀬小中学校地域交流スポーツ大会（ウタスポ）である。打瀬小学校は、千葉県千葉市美浜区<sup>10</sup>にある小学校である。当時は珍しいオープンスクール<sup>11</sup>を導入し、そのための独創的な施設等が設置されていることで、今では多くの人々に注目されている。しかし、開校した1995年当時は周辺地域の居住者自体があまりいなかったため、児童数が非常に少なかった。そこで企画されたのが、打瀬中学校や地域住民と合同で行う運動会である。児童数が増えた現在はもう開催されていないが、今でもその名残りとして打瀬小学校の運動会は「ウタスポ（打瀬地域交流スポーツ大会）」と称されている。

小学校や中学校の運動会というと、通っている児童の家族が見に来るというイメージが強いのではないだろうか。中学生にいたっては誰も呼ばない人も多いかもしれない。しかしこれに対してウタスポは、小中学校に直接つながりを持たない周辺住民を呼び込むことに成功した。その理由としては、地域住民も多数参加したこと、当時他に地域住民が集まれるイベントがなかったことが影響している。自治会の運動会のようなイベントにすることで「小中学校の運動会は関係者が行くもの」というイメージをなくし、地域全体で応援しようというイベントにすることができたのである。

小中学校の運動会とは本来児童が主役であり、参加する立場だからこそ学ぶことが多くある。一方で、近年では保護者が参加する競技があったり、リレーのエキシビジョンマッチで教員が走ったりと、児童が「観戦者」となるような種目を設けることがある。これが意外と盛り上がる。ウタスポは、地域住民が参加する競技を取り入れることで、そういった児童の観戦の時間を増やした事例だといえるかもしれない。応援の楽しさや一体感を体験できるという意味で、児童の成長に大きく貢献すると考えられるだろう。また、保護者や地域住民が一方的に児童を応援するよりも、相互に応援する一応援されるという関係を構築することで、より深いつながりを生み出すことにもつながっている。

ウタスポは、児童数の少なさを理由に運動会の規模を縮小したりせず、地域交流スポーツ大会として周辺住民を巻き込んだことが結果的に功を奏した事例といえる。当時は誰も予想していなかったかもしれないが、打瀬でもっとも盛り上がるイベントになったのである。残念ながら現在はもう合同運動会は行われていない。しかしその代わりとして、地域住民主体の「ベイタウンまつり」が毎年開催され、地域イベントの要となっている。ウタスポは、まだ街が未完成であったにも関わらず、住民同士の交流の楽しさを体験できた場となり、その後の住民主体の地域づくりにも好影響を及ぼしているといえるだろう。

この事例から分かるように、ふとしたきっかけでスポーツ観戦の機会は生み出すことができるのである。身近な運動会や競技大会に興味を持ち、「応援したい」「見に行きたい」という気持ちを抱いている人は意外とたくさんいるのかもしれない。興味のない人であっても、訪れてみたら案外楽しめるかもしれない。本当の問題は、そうした気持ちを尊重できる

「観戦の機会」を、どれだけ身近に用意できるかという点なのではないだろうか。

これまで挙げてきた4つの事例により、実際に地域で行われているスポーツ観戦は、当該地域に大きな効果をもたらしているということが明らかになった。その効果も地域によってさまざまであり、前述で指摘した4つの効果の幅を超えている。中には、想定外の良い効果がもたらされることもある。このことから、地域で「見るスポーツ」を振興することは、地域にとって大いに価値があることだと言えるだろう。

#### (8) 地域をより豊かな姿に導く「見るスポーツ」

本論では、地域での「見るスポーツ」がもたらす効果について論じてきた。ここであらためて指摘したいのは、地域スポーツ観戦はプロスポーツ観戦とは違ったさまざまな可能性を有しているということである。これまで述べてきたように地域住民に対してポジティブな影響を及ぼすという効果に加え、人々が持つ潜在的な地域コミュニティへの希求を満たす力も持っているのではないだろうか。興奮や感動体験によって創出される一体感は、地域住民同士の交流のきっかけを生み出し、地域への愛着や帰属意識、つまりは地域との結びつきを強固にすることができるのである。これは、年齢や価値観など関係なく、自然と素直な感情を引き出してくれるスポーツ観戦にしかできないことである。

新型コロナウイルスの影響で、スポーツ界は今さまざまな課題を抱えている。地域におけるスポーツに関しても例外ではない。今後しばらくはスポーツ観戦の機会が減少することが予想されるだろう。こうした状況を受け、地域スポーツ観戦においてもオンライン化が進められることは間違いない。リアルタイムの放送と録画放送を使い分けながら、オンラインで観戦を楽しめる機会が増えることが予想される。臨場感や一体感などは感じづらくなってしまっても、自分の余暇時間や生活スタイルに合わせて観戦することが可能になり、より手軽にスポーツ観戦を楽しめるようになるかもしれない。

さらに、こうした状況だからこそできる発想で、新たな応援の方法が生み出されることを私は期待したい。例えば、オンライン上で応援のメッセージを送ることができるようになったり、横断幕に代わる斬新な制作物が誕生したり、映像や画像などで選手を鼓舞するような演出をしたり、といったものである。派手なことをやったり、手間や時間のかかることをやる必要はない。しかし、地域でスポーツをする人々に対してのこうした応援の気持ちを掬い取り、選手と結びつけられるような何らかの仕組みが確立されてほしい。こうした状況だからこそ、応援したいという気持ちを無駄にするべきではないのである。

地域スポーツ観戦は、プロスポーツ観戦に比べ大きな進化や最新の技術の導入は難しい。しかしその規模が小さい分、地域性を活かした柔軟で独創的な対応ができるのではないだろうか。観戦の規模をただ縮小するだけでなく、代わりに観戦方法や応援の幅を広げることで、今まで見えなかったスポーツとの関わり方が見出され、それぞれが自分に合った楽しみ方を選択できるようになることを期待したい。

これまで紹介してきた事例を振り返っても分かるように、地域スポーツ観戦は住民それぞれが自分のニーズに合った消費の仕方を選択し、多様な角度から楽しまれている。こうし



た多様なニーズに対応できる地域スポーツ観戦のあり方が、地域の課題解決の手立てとなったり、思いがけない地域の魅力創出につながることもある。こうした効果を上手く活かすことができれば、その地域独自の魅力や地域性などが次々に引き出され、より豊かで色濃い地域の姿が導き出されるのではないだろうか。地域コミュニティの再生や地域の魅力創出が課題となっている今、こうした新たな可能性に着目することの意義は大きい。地域スポーツ観戦の持つ力がより一層注目され、今後の地域における「見るスポーツ」の役割が広がっていくことを大いに期待したい。

---

<sup>1</sup> Norbert Dunning・Eric Elias 「スポーツと文明化—興奮の探求」,法政大学出版局,1995.

<sup>2</sup> 杉本厚夫「スポーツを『観る』ことと『視る』ことの相克—駅伝・マラソンを事例として—」,スポーツ社会学研究 25 (1),2017.

<sup>3</sup> 押見大地・原田宗彦「スポーツ観戦における感動場面尺度」,スポーツマネジメント研究 2 (2),2010.

<sup>4</sup> 押見大地・原田宗彦「スポーツ観戦における感動：顧客感動・満足モデルおよび調整変数の検討」,スポーツマネジメント研究 5 (1),2013.

<sup>5</sup> 海部川風流マラソン HP (2020年6月現在) <https://www.kaifu-furu.jp/>

<sup>6</sup> RUNNET「第12回徳島・海陽 究極の清流 海部川風流マラソン」(2020年6月現在)  
<https://runnet.jp/report/race.do?raceId=234835>

<sup>7</sup> 1年2シーズン制(春季/秋季)のリーグ戦。出場校は、早稲田大学・慶応義塾大学・明治大学・法政大学・東京大学・立教大学の6校。各シーズンで6チーム総当たり戦を行う。

一般財団法人 東京六大学野球連盟 HP (2020年6月現在) <http://big6.gr.jp/index.php>

<sup>8</sup> 2011年に24年ぶりに復活し、その後は毎年開催されている。中でも大縄跳びや綱引きが非常に盛り上がる。当日までの練習や作戦の考案に加え、チームカラーのTシャツを用意したり旗を作成したりといった本格的な準備も行われ、社員の中でも評判が高い。

NEWSWITCH. 国広伽奈子「企業はなぜ‘社内運動会’を開くのか」(2020年6月現在)  
<https://news witch.jp/p/15315>

<sup>9</sup> 事業所や部署ごとに8人1チームで編成。トヨタスポーツセンター(愛知県豊田市)を舞台として一般コースは30.5キロ、女性の部などその他のコースは22.5キロのタイムを競う。会場では、観客向けに食べ物を販売したり、自動車の展示を行ったりしている。

笹川スポーツ財団 HP. 飯塚さき「つなぐ『ものづくりたすき』 トヨタ自動車社内駅伝大会」(2020年6月現在) <http://www.ssf.or.jp/topics/tabid/1722/Default.aspx>

<sup>10</sup> 美浜区は埋立地として整備されており、小学校があるエリアは「幕張ベイタウン」と呼ばれる集合住宅地となっている。このエリアは画期的な空間利用や斬新なアーバンデザインの建築物が多く、数々の研究者に注目されている。

千葉県 HP「幕張ベイタウン」(2020年6月現在)

<https://www.pref.chiba.lg.jp/kigyuu/kensetsu/youkoso/chiku/baytown.html>

<sup>11</sup> 従来の固定的な教育内容・学級編成の枠を外して、子どもの興味や能力に応じた柔軟な教育を行う学校のこと。

goo 辞書「オープンスクール」(2020年6月現在) <https://dictionary.goo.ne.jp/word/オープンスクール/>